ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第130号 2025年10月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 現代私的院生事情（3）～ 博士課程編②	猪股 大輝	2
敗戦後の新制大学・慶應義塾大学法学部の教育風景について ― 関係者らによる座談会(2001年1月)から ―	谷本 宗生	6
女子教育史散策・昭和戦時下編（79） 金城女子専門学校及び付属高等女学部の場合2	長本 裕子	9
進学案内書にみる戦前期東京の予備校（18） :『入学選定男女東京遊学案内と学校の評判』（大正7年）（2）	吉野 剛弘	18
資料から見る「教育」の歴史⑦ ―「福澤先生の遺志を遵奉し慶應の大学昇格拒絶運動」『読売新聞』(1919年12月9日)―	山本 剛	21
刊行要項（2015年6月15日現在）		24
短評・文献紹介 アニメ作品「悪役令嬢転生おじさん」（2025年）について（谷本）、映画「かば」について（冨岡）		25
会員消息 谷本宗生、山本剛、猪股大輝、冨岡勝、長本裕子		26

コラム
現代私的院生事情（3）～
博士課程編②

猪股（いのまた）　大輝（だいき）
（東洋大学）

2024年3月をもって東京大学大学院教育学研究科の博士課程を修了し、縁あって東洋大学に職を得た。私の専門は教育史（生徒会活動を中心とした教科外活動の成立史）である。先生方の温かいご指導や、運が向いたことなどもあり、標準修業年限（修士2年・博士3年）で博士論文提出まで進むことができた。ただし、年限内で修了した背景には、近年の大学院学生を取り巻く事情もある。コラムとして第123号では修士課程を取り扱った。今回は博士課程の生活と2年目までを扱う。

1. 現代査読対応事情

D1の9月に学会発表、11月に教育史学会の『日本の教育史学』に投稿していた論文の査読結果がD1の年度末に帰ってきた。結果は「再査読」であった。D2の4月はこの査読への対応から始まる。

ここで、近年の学会誌の査読事情についてふれたい。昨今、いくつかの教育学系学会では査読の「改革」が叫ばれている。若手ゆえ、査読はもっぱら受けるもので審査する側にはいまだ回っておらず、時々の編集委員会の方針によるところもおおきいだろうが、全体として丁寧で建設的（あるいは教育的）な査読が増え、投稿論文に対する掲載論文の割合にも配慮するような流れが出てきたようである。こうした変化は、院生の側からすれば、一方では早期段階から学会誌へ論文を投稿したり、掲載したりする道を開くものだったが、他方では、早い時期から研究自体ではなく査読対応に時間を使う風潮を広め、また掲載される論文も長年の成果を集積したものと言うよりは、査読に過不足なく応答できる程度にまとめられた小粒な印象のものを増やすことになった、とも感じる。

ともかく、私が投稿していた教育史学会の『日本の教育史学』も掲載に苦労することで知られる媒体であるが、上記のような近年の査読事情を踏まえた査

読体制が取られるようになっていたと聞く。受け取った査読文は大変丁寧に、どのように議論を展開すれば全体としてよりよいものになるのかを参考となる具体的な文献名まであげて（!）整理したものだった。私の場合には査読の指摘はどれも首肯できるものだったので、初回投稿時の不明を恥じながら、一つ一つできる範囲で応答していった。結果的にD2の5月には論文「19-20世紀転換期アメリカにおける教科外活動を通じた市民性教育方法の開発」として掲載が決定した。

私の場合、論文を書くスキルは、大学院内の指導会などでの指導よりは、いくつかの査読対応を経て磨かれた部分が多い。この点を踏まえると、近年の論文を書き上げる指導は、顕名の指導教員から匿名の査読者へと外部化されつつある、と言えるかもしれない。

2. 博士課程2年目 ～積み重なる研究以外のこと

上記のように査読対応から始まったD2の生活であるが、学年の切り替わりと共に、いくつかの変化があった。

第一に、D1の秋に内定していたDC2の奨励金受給が始まった。安定的な収入を得ることで、精神面で随分安定したことはもとより、合わせて科研費が支給されたことが大きかった。これまで何をするにしても自腹であった研究用の諸々の費用を一転して公費で賄えるようになり、手元においておきたい本や、図書館での購入には時間がかかる新刊の研究書を気にせず買い揃えたり、国会図書館等での複写に際してもお金のことを気にせずに思う存分取れたりするようになった。

第二に、非常勤講師としての働き方も変化した。前稿で書いたように、博士課程のスタートとともに、教育学を学ぶ身として学校現場での経験をつもうと、紹介のあった東京大学教育学部附属中等教育学校での非常勤講師を週2回、計6コマ担当し始めた。1年目は4年生（高校1年生）の世界史Aを担当したが、2年目は2年生（中学2年生）の社会（歴史的分野）を担当し、江戸期までの日本史

通史を扱うことになった。大学入試では日本史を利用しなかったので、ほとんど一からの勉強し直しで、講談社学術文庫の「日本の歴史」シリーズを通読し授業準備を進めた。歴史を学び、知ることは好きなたちで、教材準備は苦ではなく、生徒たちの反応や興味関心に合わせた発問や教材の作り方など学ぶところは大変多かったが、相当の時間が費やされた。

また、新たに先輩からの紹介で専門学校の保育士養成課程（短大通信部講師と兼任）を50分週3コマ、同一の少人数の学生たちを相手に通年で担当することになった。こちらも当時は別のアルバイトの関係で保育園に通うことは多くあったが、保育の知識などはまるで無い中だったので、勉強しながら授業準備を進めた。専門学校の学生の多くには勉強への苦手意識があって、大所高所から講義をするだけではとてもついてこない。なるべく丁寧に声掛けをし、やればやっただけできるようになる、という実感をもたせるような指導の試みはよい経験となった。しかし、これらの結果、50分授業を週9コマ、そのうちオリジナルの授業を5コマ新しくつくることとなり、毎週授業準備に追われた。

これらの変化に加え、博士1年目からの継続する事項もあった。まず、本レター同人の田中智子さんの研究補助者や、早稲田大学幼児教育開発研究所の事務局を兼任した。

また、コースワークとして、指導教員であった小玉重夫先生のゼミでは、春学期はジュディス・バトラーの『権力の心的な生』、秋学期はジャック・ランシエールの『不和』を購読した。また、大学院を通じ受講していた小国喜弘先生のゼミでは個人テーマとして春学期には宮坂哲文、秋学期には竹内常一の所論をそれぞれ扱って発表した。ゼミ発表では、自身の研究テーマから離れていても、可能な範囲で諸文献を読み込み、1万字程度のコメントレジュメをきる風潮を個人的に引き継いでいたから、報告一本の準備に半月ほどの余剰時間をすべてつぎ込むことになった。

3. 研究の進展と博士論文

2. でみたような諸作業により、D2の期間を通じて、学期中はほとんど自分の研究を進める時間はなく、長期休暇中にまとめて研究を進めることになった。ある意味では大学に就職した後の予行演習の感もあるが、本末転倒であった。

ともかく、D2の夏休みには、修士論文では生煮えであった部分を補強すべく、資料集めと分析を進めた。相応に形になって11月の関東教育学会大会で発表、1月に日本教育学会の『教育学研究』に投稿した。最終的に「アメリカ課外活動成立過程に関する一考察」として掲載に至る論文だった。このうち、半分は修論までで調べ上げていた内容であった。もう半分については、ほとんどはインターネットを介して、オープンアクセスや東大の契約するデータベースを通じて取得できる資料を用いることで論文作成までこぎつけることができた。このあたりの研究環境の変化も、院生の研究業績の早期化の一助ということができるかもしれない。

このように、目の前に迫りくる様々なことを乗り越えながら必死に取り組むうちにD2の1年は終わっていった。そんな3月のこと、指導教員の小玉先生に呼ばれ、博士論文をなるべく早く書くように、との指導があった。後からわかるが、翌年度、小玉先生が東大を出られることになっていた。こうした中、博士課程の3年目が始まっていった。

（続く）

＊コラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

敗戦後の新制大学・慶應義塾大学法学部の教育風景について

― 関係者らによる座談会(2001年1月)から ―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

敗戦後の新制大学・慶應義塾大学法学部の教育風景「格調の高い講義」について、2001年1月岩谷十郎司会のもとで、関係者ら(平良・金子芳雄・川口實・米津昭子・倉澤康一郎・宮澤浩一・森征一)による座談会が開かれ、次のように興味深く紹介されている(慶應義塾大学法学部編『語り継ぐ三田法学の伝統』2006年所収)。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

倉澤　僕は学生時代に伊東乾先生のボヤキを聴いたことがあった。「母校の教師をやるというのは、実に辛いもんでして」なんていって(笑)。要するに教員として雇われているのか、学生に対するチューターなのかという。いまは一種の大学の教員の構成の純潔主義みたいなものが、弊害はもちろんあって、それでだいぶそういう点では慶應なんかも改善はされているけど、そういうよさの面もあるんですね。

平　助手というのは先生と思ってなかったよ。ただ、伊東乾さん、田中實さん、あれは先輩だと思っていて、先生の部類で考えていなかったね。

米津　とくに講義をもってないし、われわれも講義を習うということはなかったから。

平　本当にいろんなこと勝手なことをいって帰ってくるという、いったり、聴いたりして帰ってくる。

金子　われわれが先生と思うのは峯村光郎さんじゃない、それから手塚豊先生もいるけれども。

米津　手塚先生は名古屋弁で、「わしゃ専任講師ですよ」って、こういういい方ですものね。

岩谷　当時の専任の「先生方」というのは、浅井清先生、小池隆一先生、永澤邦男先生、津田利治先生、宮崎澄夫先生、今泉孝太郎先生、島谷英郎先生……でしょうか。

金子　一三人ぐらいじゃない。

宮澤　伊東さんと田中實さんは講師だった。

平　われわれのときはまだ助手で、手塚さんだけ助教授になった頃かな。

倉澤　だから僕なんかは三年になっても、たとえば、平良さんは英法をまだやってないから、伊藤正己さんの英法、それから金子芳雄さんも行政法の勉強中なので東大の田中二郎さん。刑法は尾後貫壮太郎さん。

米津　ああ尾後貫先生、ノートも本もお持ちにならず、小さな六法全書を片手に教室に入って来られて、サラサラと刑法各論の講義をされました。

川口　昭和二六年当時ですが、その当時の教授は非常に風格があるというか、格調の高い雰囲気で講義をされたのでみんなびっくりしたんです。ほかの大学の第一級の先生方もずいぶん非常勤でみえていられました。明治生まれの先生方、一番お若かったのが峯村光郎先生で明治三九年生まれなんですが、その先生方の格調の高さというか、学生に与える影響力、感銘の深さというのは、いまから考えてみても素晴らしい。お一人ずつずうっとお名前挙げていっても、本当にびっくりするくらい説得力のある講義をされて、それだけに教室に熱気があったと思います。

米津　民訴では大審院長の細野長良先生がいらしてたんですよ、受講していた学生数はほんの少しでしたが、丁寧でわかりやすい講義でしたね。

平　実際的な話でおもしろかった。伊東乾さんが滅法難しい民訴を教えるものだから。難しい理屈をいうものだから、細野さんの民訴のほうがわかりやすかった、ああこういうものだということがわかった。

米津　伊東乾先生は宮崎澄夫先生の代行で講義を一回伺ったことがあったけれど難しかった。

金子　細野先生と宮崎澄夫先生の試験を受けたら同じ問題を出してたの、こっちもまた同じ答案を書いたら怒られた(笑)。

倉澤　非常勤の先生は、成績が甘かったんですよ。平良さんがアメリカから帰ってきて、それで三分の一ぐらい落として、「平良皆殺しの歌」って、評判だった学生時代に(笑)。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

戦後の新制大学での屈託ない教育風景がリアルに感じられて、関係者らの証言はとても有意義だ。これは慶應大に限らず、他の大学でも貴重な証言記録が残されているであろう。また機会をみて、NLでも紹介していきたいと思う。

女子教育史散策・昭和戦時下編（79）
金城女子専門学校及び付属高等女学部の場合2

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

ニューズレター第129号では、1937（昭和12）年7月、国家総動員法が公布されてから、1941（昭和16）年11月まで、金城学院の授業や行事にどのような変化が起こったか記した。今号では、同年12月8日の太平洋戦争突入以後について記そう。

金城女子専門学校付属夜間高等女学部誕生

1942（昭和17）年4月、修業期間3か年の、金城女子専門学校付属夜間高等女学部が誕生した。

この付属夜間高等女学部について『金城学院百年史』で紹介されている内容を略述する。

中等教育を受けたいという希望を抱きながら、その希望を満たすことができない少女たちに、その機会を与えたいという年来の計画がようやく実現できた。中部地方で最初の夜間の高等女学校であった。210人の志願者の中から140人が選抜され、4月6日、開校式が挙行された。夜間部主任の他、2人の教師が担当し、また昼間部の教師が少しずつ教授した。多くは国民学校高等科を卒業したばかりの少女たちであったが、中には27、8歳の婦人も混じっており、皆セーラー服を着用して、勉学に励んだ。大多数は昼間働いている給仕、事務員、タイピスト、看護婦たちで、身体健康、意志は堅く、成績も優秀であった。昼間の生徒たちよりも学業に熱心であった。しかし、昼間働きながらの夜間高女部に通うことは厳しいとみえ、開校した翌月の5月調べで、生徒数は100人に減少していた。学徒動員令により昼間の生徒たちが軍需工場に動員されていた期間も、夜間部は授業を続けることができた。軍需工場に付き添ってばかりで、教える機会を失っていた教師たちにとって、夜間部で教えることは生きがいでもあった。

空襲

1942（昭和17）年4月18日、名古屋地方に、米軍陸軍航空軍B-25爆撃機2機による初の空襲があり、死者8人、負傷者31人が出た。

「出版事業令」公布

1943（昭和18）年2月、「出版事業令」が公布された。地方庁管轄の雑誌は「自発的廃刊」が求められた。そのため、1911（明治44）年5月に創刊された学友会誌『緑野』（途中『みどり野』と改称）は、第31号まで続いたが、1944（昭和19）年廃刊されることになった。

英文科募集停止

1944（昭和19）年3月、英文科の募集が停止され、代わって4月から経済科が新設された。男子に代わる高級事務員を養成するためであった。生徒は100人集まったが、3か月足らずで、7月から終戦まで全員岡崎高野精密工業に動員され、以後は週1回の授業日に細々と学業を続けた。同年3月、家庭科と洋裁科目も廃止となった。4月から家庭科は育児科、保健科、被服科に分かれることになった。しかし、これらもわずか3か月の授業で、全員7月から終戦まで刈谷豊田織機工場に動員された。

繰上卒業証書授与式

1941（昭和16）年10月16日、「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」（勅令）が公布された。昭和16年度は3か月短縮の文部省令が発布された。これにより昭和16年度専門部3年生の繰上卒業証書授与式（第15回卒業式）は、12月26日、大講堂で行われた。17年度以後19年度まで専門部卒業生は6か月短縮（1941年11月1日の文部省令）となって、9月卒業となった。18年度からは高等学校高等科・大学予科

の修業年限は2か年となり、中等学校の修業年限は4か年と、それぞれ1年短縮することとなった。従って修業年限5か年の金城女子専門学校付属高等女学部も修業年限4か年となった。

金城女専号を献納

1943（昭和18）年11月、日本基督教団第2回総会は、総員起立によって「軍用機献納」を決議した。同年12月、日本基督教団派遣特別講師の平松實馬は金城女子専門学校に来て、講演と詩吟を通じて飛行機献納を奨励した。金城の教職員はじめ関係者一同は一致協力して募金に専念した。愛知県当局も飛行機献納を推進した。飛行機献納運動は、各宗教団体その他も県当局の要請に基づいて行った全国的運動であり、キリスト教、仏教、神道系の諸学校も参加していた。金城女子専門学校は飛行機1機分として海軍に10万円、余剰金3万円を陸軍に献納した。1944（昭和19）年2月、海軍武官牧大佐並びに山本大尉を招いて盛大な献納式を栄光館で行い、式後は校庭で、吹雪の中、全校生徒は閲兵分列式を行った。同年4月、名古屋市公会堂において命名式が神道儀式によって行われ、「金城女専号」と名付けられた。名古屋地方からは金城はじめ14機が命名された。愛知県下で1校1機の飛行機献納を行ったのは金城女子専門学校だけであった。戦後これが、市村與市校長が教員不適格として教職から追放される理由の一つとなる。

飛行機献納に関する生徒の回想

高女部生徒豊田江美（旧姓丹羽）は、後年、学友会誌『みどり野』に飛行機献納時の思いを寄せている。

> それは第二次大戦末期にさしかかっていた昭和19年の1月だったと思います。クリスチャンスクールなるが故に時の政府から色々な弾圧を受けていたためではないでしょうか。金城は全校を挙げて募金をして軍用機を

一機献納することになりました。毎日、折りにふれて呼び掛けられましたが、なかなか目標額に達しなかったのでしょう。或る朝の礼拝後、一段と激しいアピールがありました。高女部として最年長の5年生とはいえ、私は早生まれの16歳でした。丁度その学期から学校は閉鎖で軍需工場へ動員され、工場から給料が貰えるからそれを全部募金に出しなさいとのお話はその時代当然至極の事で、「もともと工場からお金が貰えるなどと思ってもみなかったし……」と語り合い乍ら何気なく栄光館から教室に戻りました。

ところがそこで生涯忘れられない出来事が起こったのです。学級担任の蠣崎稲男先生が学級全員の前でカーキ色の国防服の腕に顔を埋めて号泣されたのです。涙声ではっきりしませんでしたが、「飛行機なんて、軍用機なんて、この学校はそんな学校じゃありません！」というような言葉だけが耳に残っています。勿論全員が募金には応じましたが、如何にもあの時代の金城を象徴するような気がいたします。（『みどり野　金城学院創立百周年記念文庫』、『金城学院百年史』より）

学徒動員

1944（昭和19）年1月、政府は「緊急学徒勤労動員方策要綱」を閣議決定し、学徒動員を「勤労即教育ノ本旨に徹シ」て強化し、「動員期間ハ一年ニ付概ネ四ケ月ヲ標準トシ且継続シテ」行うことを建て前とした。同年2月、日本の海軍基地トラック島が、米海軍の攻撃により甚大な打撃を受け、戦局は不利となり、2月25日、「決戦非常措置要綱」を決定した。3月7日、「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」を閣議決定し、①学徒の通年動員、②学校の程度・種類による学徒の計画的適正配置、③教職員の率先指導と教職員による勤労管理など、動員の基準を明らかにした。同年4月、文部省は「学徒勤労動員実施要領ニ関スル件」を指令した。これは作業場を「行学一体ノ道場」とし、学徒に「奉公精神、教養規律ニヨリ、作業場ヲ純真

且明朗ナラシムルコト」を要請し、教職員に「率先垂範陣頭指揮」を強調したものであった。同年5月、文部省は、「勤務時間中軍事教育、教授訓育ノタメ一週六時間ヲ原則トスル時間ヲ設ク」べきことを指示した。しかし、同年7月には、「学徒勤労ノ徹底強化ニ関スル件」を通牒し、1週6時間の教育訓練時間の停止、中等学校低学年生徒の動員、深夜業を中等学校3年以上の男子のみならず女子学徒にも課することなどを指令した。

下記の表は、金城学院の勤労動員生徒の配置である。

会社工場名	期　　間	学　　級
愛知航空機永徳工場 （爆撃後十数ケ所ニ疎開）	昭和19年5月ヨリ終戦マデ	専門部2、3年一部 附設課程大部（ママ）
同　　船方工場 今村工場 一宮工場	昭和19年5月ヨリ昭和20年6月マデ 昭和20年7月ヨリ終戦マデ	専門部2、３年一部 附設課程一部
鳥居松陸軍造兵廠	昭和20年7月ヨリ終戦マデ	国文科1年（宿泊）
同	昭和20年5月ヨリ終戦マデ	高女部3年
刈谷豊田織機工場	昭和20年7月ヨリ終戦マデ	育、保、被、1年（宿泊）
岡崎高野精密工業	同上	経済科1年（宿泊）
荒井製作所古出来町工場 後ニ佐屋工場	昭和19年5月ヨリ終戦マデ	高女部4年A
尾張時計矢田工場 後ニ瀬戸工場	昭和19年5月ヨリ終戦マデ	高女部4年残り
三菱重工業大曽根工場	昭和19年10月ヨリ昭和20年5月マデ	高女部3年
三菱発動機研究所	昭和19年11月ヨリ昭和20年4月マデ	高女部2年
大日本鉄砲勝川工場	昭和20年5月ヨリ終戦マデ	高女部2年
備考　高女部1年並ニ夜間部ハ未動員		

※1946（昭和21）年5月、定期理事会で報告されたもの。『金城学院百年史』406・407頁により作成。

昭和19年5月から、高女部1年と2年を残して全員が出動した。同年8月、「学徒勤労令」が公布された。同年10月、高女部2年生も、同年11月には高女部1年生も動員された。学園に残った一部の職員と虚弱生徒100余人も学校工場で航空食料の包装、軍衣の補修作業を行った。1945（昭和20）年、戦局は苛烈となり、3月、政府は「決戦教育措置要綱」を閣議決定し、国

民学校初等科を除いて、学校に於ける授業は昭和20年4月1日より昭和21年3月31日まで、原則として停止することとした。

金城学徒の犠牲

飛行機発動機の生産の7割を占めるといわれた名古屋地区への爆撃は熾烈であった。1944（昭和19）年12月13日、米軍B-29爆撃機90機により、東区大幸町の三菱重工業名古屋発動機製作所大幸工場（三菱発動機第四工場）に対する空襲が行われた。この名古屋空襲最初の日、三菱発動機研究所に動員され、まだ1か月もたたない高女部1年生3人が、退避中に眼前に落ちた爆弾の穴の縁に埋もれて窒息死した。金城関係者での空襲最初の犠牲者となった。3人は日ごろ教えられた通りに、目と耳を両手で被ってうつ伏したままで亡くなっていたという。

激化する名古屋空襲

1945（昭和20）年1月23日、学校は最初の爆撃を受けた。後援館を半壊。3月に入ると空襲は連日のように烈しくなった。3月15、16日ごろ、校長は寄宿舎を閉鎖することを決意し、生徒たちも荷造りした。3月18日の夜半から19日未明にかけて焼夷弾を雨のように受け、栄光館と門衛詰所を除き、すべて焼失した。西洋館、寄宿舎、家政館、地塩館、後援館、報国館もすべて姿はなかった。校庭はすり鉢型に20mもえぐられた。重要書類のほとんどが焼失した。かろうじて図書館が戦火から逃れた。そして3月25日の大型爆弾により栄光館も大破した。卒業式だけは学校で行おうと準備されていた1,041人分の卒業証書も焼失した。やむなく27日、卒業証書授与式は動員先の工場で行うこととなった。四つ切の藁半紙にガリ版刷りの仮卒業証書を急造した。名前だけは毛筆で丁寧に書かれていたという。

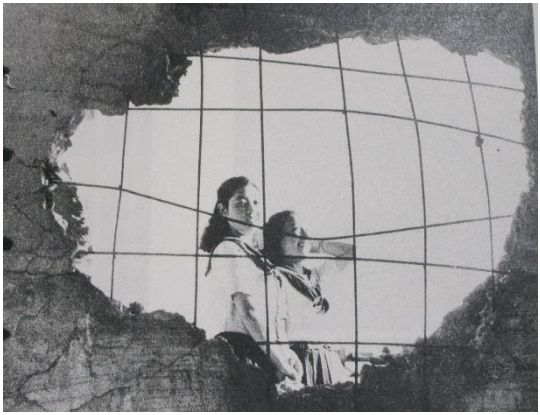
米軍による名古屋地区への無差別爆撃は、1945（昭和20）年3月ごろから深夜の空襲が多くなり、7月26日までに63回の空襲を受けた。B-29の

来襲は2,579機、投下された爆弾総量は判明分のみで14,500トンを越え、被害は死者7,858人、負傷者10,378人、被災家屋135,416戸に及んだ（ウイキペディア「名古屋大空襲」）。名古屋市街は壊滅的に破壊され、名古屋駅も国宝の名古屋城も炎上した。

戦争末期の金城学院

1945（昭和20）4月1日、高女部の入学式が挙行された。新入生230人。66人はすぐに疎開転校の手続きをとった。その後も転校手続きをとる生徒が多く、学校に残った1年生は90人ばかりとなった。4月5日、天井と西側に大きな穴が開いていた栄光館で、高女部1年生だけの授業が始まった。午前中は授業、午後は焼け跡の整地作業と農耕作業、警報のサイレンが鳴ると帰宅することになっていた。4月6日、専門部の入学式が行われたが、6月末日まで、各出身学校付設課程生と一緒に工場に動員されていった。前年度は2,700人近くいた生徒数は三分の一に激減していた。教職員も退職していった。

5月、栄光館を応急修理し、高女部1年生と夜間部が授業を開始した。5月14日、B29の爆撃により、教職員、生徒たちに罹災者が多く出た。6月9日、愛知航空船方工場が大爆撃を受け、出勤中の生徒数人が負傷した。



爆撃でポッカリ穴があいた栄光館
（『目で見る金城学院の100年史』より）

動員先の工場疎開に伴い、瀬戸の奥、鷹来村、岡崎、刈谷など辺鄙な所に転属が命じられた生徒たちがいた。専門部や高女

部4、5年生は、転属先で合宿するようになった。1週に1日の休みの日には教師たちは合宿所に出向いて、合宿所を教室にして授業を行った。時々休みがあったのは、材料が手薄になったからとみられる。

学校では高女部1年生が、毎朝礼拝を行い、2時間の授業、あとは焼け跡を整理して、南瓜、芋などを植え付ける作業をした。夜間部の生徒たちは、昼間の勤めを終えると元気に通学してきて、警報のため時々授業が中断されたこともあったが、毎晩時間通りに授業は行われた。

5月22日、「戦時教育令」が公布された。学徒報国隊を直接国土防衛に協力させるねらいであった。8月15日、高女部1年生約90人は、栄光館に集まり、ラジオによる天皇陛下の声を聞いたが、雑音で何もわからなかった。教師の説明もないまま散会。帰宅途中で日本が破れたことを知ったという。各工場に出勤中の学徒はおおむね16日から18日の間に工場を引き上げた。一旦学校に集め、8月いっぱい休暇とした。

罹災教職員と生徒数

1946年5月30日の定期理事会で報告された罹災教職員と生徒数は以下のようであった。

罹災教職員

1,戦災ヲ蒙リタルモノ　男4　女7　計11

2,家屋全半焼壊セルモノ　男4　女7　計11

3,衣料過半数焼失シタモノ　男4　女7　計11

4,家族ヲ失ヘルモノ　男1　女0　計1

罹災生徒

正確ナル資料ナキタメ数字ヲ出スコト困難ナレド生徒総数ノ約40%以上ナリ

生徒たちの中で殉死した者は、高女部1年生の3名、動員先で負傷した者は2、3名、自宅で爆死した者は30余名にのぼった。(『金城学院百年史』より)

授業再開

9月1日から授業が再開された。焼け残った栄光館で、高女部は午前中3時限、専門部は午後3時限、夜間部は2時限の三部制で行われた。スマートなセーラー服だった金城生たちは、モンペ姿にずた袋のようなカバンを下げて登校した。しかし、生徒たちは互いに手を取り合って生きていた感激をしみじみと味わった。

参考文献

『学制百年史』、『学制百年史　資料編』文部省
『学制百二十年史』文部省
『金城学院八十年史』
『金城学院百年史』
『目で見る金城学院の百年史』
名古屋大空襲 - Wikipedia

進学案内書にみる戦前期東京の予備校（18）：『入学選定男女東京遊学案内と学校の評判』（大正７年）（2）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号では、前号に引き続き二松堂より刊行された太田秀隆『入学選定男女東京遊学案内と学校の評判』を見ていく。今号でも「各種学校」の男子の部に掲載された予備校の一部を見ていくが、掲載順の関係で取り上げるのは私立大学系の予備校になる。

五、早稲田高等予備校

所在、牛込区馬場下町二十四番地

目的、高等の諸学校に入学志望者の為めに予備教育を施すを目的とす

学年学期及休日

修業年限を一ヶ年となし之を三学期に分つ

第一期　四月一日より八月三八（ママ）一日に至る

第二期　九月より十二月三十一日に至る

第三期　翌年一月一日より三月三十一日に至る

第三条　休業定日左の如し

日曜日　大祭祝日

夏期休業　自七月一日至九月十日

冬期休業　自十二月廿六日至一月十日

学科課程及授業時間

本校の学科は修身、国語、漢文、英語、歴史、地理、数学、物理、化学、博物、図画、体操とし毎週の授業時間は三十時間以内とす

但し事宜(ママ)によりては学科及授業時間を増減することもあるへし

入学資格、本校に入学せんとする者は中学校及びそと同等の学校を卒業せる者にして身体健康品行方正の者たるべし

学費、授業料、一ヶ月金二円とす

七、明治高等予備校

所在、神田区駿河台

本校は高等の諸学校に入学するに必要な高等の普通教育を授け、修業年限は一ヶ年三ヶ月。第一期は自四月一日至六月三十日、第二期は自九月一日至九月一日。至翌年三月三十一日(下線部は誤記が含まれると思われるが原文ママ・引用者注)。本校に入学することを得る者は中学校卒業者及びそと同等の学力ある者なれども各学科の講義を聴かんとする者の為めに聴講生たるを許すものなり

九、日本高等予備校

所在、神田区三崎町

▲沿革、本校は明治卅七年の創設に懸り実に同種学校の魁なりとす、爾来年を閲すること茲に十有余星霜、其の間高等諸官立学校に入学したる者数千名の多きに達し校運日と共に益々隆盛を致し今日に到れり

目的、本校は高等の諸学校に入学せんとする者の為めに予備教育を施すを目的とす

学科、修身、国語漢文、外国語(英語)、数学、地理、歴史、物理、化学、博物、図画

修業期限を一箇年とし四月一日に始まり翌年三月三十一日に終るそを左

の二期に分つ

第一期（短期予備科） 自四月一日至八月三十一日

第二期（　　予備科） 自九月一日至翌年三月三十一日

入学資格 第六条 本校に入学することを得る者は中学校者(ママ)及之と同等以上の学力を有するものたるべし

第七条 前条の資格なき者にして本校の各学科の講義を聴講せんとする者は聴講生として入学することを得

第八条 入学は毎学期の始に於て之を許す

学費、入学金二円、授業料、一箇年金三十円月割分納額三円とす

職員

校長　　貴族院議員 男爵 松岡康毅

理事 内務次官 貴族院議員 法学博士 水野錬太郎

理事　　司法省参事官 ドクトル、ユリス 山岡萬之助

幹事　　ドクトル 川口義久

私立大学系の予備校は他にも存続していたが、ここに掲載されたのは 3 校のみである。掲載の基準が明示されているわけではないので、他の予備校が掲載されなかった理由は不明である。

次号もひきつづき「各種学校」に掲載された予備校を見ていく。

資料から見る「教育」の歴史⑦
ー「福澤先生の遺志を遵奉し慶應の大学昇格拒絶運動」
『読売新聞』(1919年12月9日)ー

山本（やまもと） 剛（たけし）（有明教育芸術短期大学）

1918(大正7)年、大学令（勅令第388号）が公布され、公私立大学や単科大学が認められることになった。

特に「大学」をめざして設立された私学にとって、このことは官立大学と同等の大学として認可されることであり、ようやくその宿願を果たしたことを意味する。

大学「昇格」を実現させた私学の学校沿革史では、大学「昇格」へと至る過程を重要な項目として詳細に描くこととなる。それは言うまでもなく、私学関係者の積年の運動の成果として、また大学令及びその施行規則である大学規程に示された大学設立に必要な要件をいかに母校の関係者が乗り越え、大学を設立していったのか、というものとなる。

ところが、当時、学内では大学をめざし、「昇格」を要望していく動きに対して、一定の反対意見が出ていたことは事実である。一部の学校沿革史の記述には、この点を指摘するものも少なくない。それは、大学「昇格」が必ずしも私学にとって、喜ぶべきものではなく、むしろ多くの問題を孕んでいたとする見解を示すものである。たとえば、それは次のような記述である。すなわち、「大学令によって大学に昇格することができた私立大学は、国家統制と官僚統制がこれまで以上に強化されることになり、私立大学の自主的、個性的な発展にとって大きな困難をもたらすことになった」(『法政大学百年史』(1980年))。または、永井道雄氏の言うように、大学「昇格」とは、早稲田、慶應義塾、同志社のような自由主義派の私学が、その初期の自由主義的精神が大幅に修正されて、国家の教育体制に組み込まれていくことであると指摘するものである。(『近代化と教育』(東京大学出版会。1969年))

これらは、大学令による大学認可が、国家による私学への統制・介入であるとして、私学の自由な発展を抑制するものであったという見解である。ただし、具体的に、それらはどのような点で、私立大学が国家の教育体制に組み込まれていったのか、または、実際、当時の大学「昇格」を目指す動きのなかで、それらの統制・介入にはっきりと反対し、大学「昇格」を否定する意見はあったのであろうか、筆者の関心はここにある。

ここに、1919(大正8)年12月9日の『読売新聞』に掲載された、慶應義塾の学生が、大学「昇格」に対して反対する様子を伝える記事がある。

慶應義塾は、1919年8月8日付で大学令に基づく大学設立に関する認可申請書を文部省に提出し、翌1920(大正9)年2月5日付で大学設立が認可されたので、この記事が出たのは、ちょうど同校が認可される直前の時期である。

同紙では、「福澤先生の遺志を遵奉し慶應の大学昇格拒絶運動」と題して、学生のなかに「大学昇格拒絶の新運動」の気運が高まっていることを伝えている。

以下、記事の内容をみると、ある学生は、「大学昇格」に反対して、「学生大会を催して六千の塾生に訴へる積である」という。学生は、次のように主張する。すなわち、「世の中は大学昇格運動で夢中」になって騒いでいるが、慶應義塾内では、「大学昇格の資格を拒絶し、飽く迄福澤先生の遺志を遵奉して独立自尊の精神に生きんとする新運動が勃然として起」きていると言う。

そこで、学生には「福澤先生の教義は岩のやうに強い、故先生の精神に生きてゐた純三田派の人々の間には、折りがあつたら先生の大精神の下に義塾は義塾として三田山上に聳ゆる独立の気風、自尊の旗風を何処迄も推し立てて毅然とした一種独特の慶應義塾なるものを進め様とする念が次第に強くなつて来た」、と述べる。さらに、学生は次のように主張する。すなわち、「吾人は世を拗ねて寸毫も反対の態度に出るもので」はないが、「少くとも義塾を了解せる者なれば何人も此の新運動に参加しない者はあるまい、来春

は早々大学の認可も下る事に決定してゐるので、此運動をやるのは目下の急務である」と述べる。

このように記事の内容は、大学「昇格」が認可される直前、学生の意見としては、「大学昇格拒絶の新運動」を「徹底的に遂行」するために、近く学生大会を開き、「大学昇格拒絶」の意志を「六千の塾生に檄す」というものであった。

以上のように、慶應義塾内で、大学設立認可の直前に「大学昇格」に対する反対意見が一部の学生からあがっていたことは注目すべき点であろう。彼らの主張する「福澤先生の遺志」や「一種独特の慶應義塾なるもの」とは、ここでは具体的になにを指すものなのかはっきりとはわからないが、先の学校沿革史等で指摘された私学の個性がなくなることへの危惧を学生たちは主張していたとみてよいであろう。慶應義塾が、官立大学と同等の大学として認可される代償として、国家によって「一種独特の慶應義塾なるもの」が統制・介入されることに学生たちは反発していたのである。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

これは、アニメ・悪役令嬢転生おじさん（2025 年）の一コマ。転生おじさんこと・主人公グレイスらが所属する学園生徒会が、学園祭で主催することになった、男女逆転による演劇・王子と平民少年を、専門家らである演劇部に脚本や演出を含め、全面的な協力を依頼し心よく承諾され、なんとか短期間ながら実演することができ、聴衆らの拍手喝采を浴びる。グレイス嬢が、演劇に協力してくれた全員の労を労ったところ、逆に生徒会・演劇部のメンバーらから、この素晴らしい劇に参加することができとても光栄だったとし、要のグレイスに感謝が告げられた。みんなで苦労しながら、学祭の演劇を一つとなって集中してつくりあげることができたことは、学園生活の思い出として忘れないと実感したグレイスであった。

さらに演劇の上演準備に忙しいさなかでも、生徒会の中心として、学園祭全体の現場監督の業務にグレイスはかかわり、行事企画の一つにメイド喫茶が申請された際も、グレイスはこれを生徒らによる新たな試みとして承認した。それに対し生徒会の一部から、このような企画は学園の品位に欠けるのではないかという疑念もあがったが、新たな笑いや斬新なキャラクターなどは、ときに酷評や懸念されるのがツネだとし、なにか実際に問題が生ずれば、もちろん生徒会がしっかりと監督責任をとる心構えだとして、ノブレスオブリージュの姿勢を示したのであった。まったく、なんとも素晴らしい限りだ・・と、この作品を視聴し満足した次第。教育者の本質を考えさせる、まさに教育的な意義を痛感だ。（谷本）

10 月 25 日に浦安市で行われた映画「かば」の上映会に、実行委員の一人として参加してきた。この映画は、1985 年当時に大阪市西成区の公立中学校に実在していた教員の蒲益男（かばますお）氏について、同僚教師、卒業生から聞いた話をもとにつくった映画である。脚本・監督の川本 貴弘氏は、この映画の公式サイトのなかで、次のように述べている。「二年半をかけた取材を経て、当時の中学校でどのような学校生活が送られていたのか、何度もぶつかっては理解し合った姿を知るにつれ、現代を生きる人たちへの道しるべになるものが作れると確信しました。映画に関わる人間だからこそ、その発信力を生かすことができる。私はどんな困難があろうとも映画にしなければいけないと決心したのです。」

私は数年前に大阪の小劇場で見たが、今回再び見ることができて、そして監督や主演の山中アラタさんから直接話を聞いて、新たな発見があった。この映画は、現在、自主上映会でのみ見ることができると聞いた（DVD などはあえて作っていないそうだ）。11 月に

はは兵庫県の各地で上映会が予定されている。詳細情報は、フェイスブックやＸで告知されているが、わかりにくい場合は冨岡まで。（冨岡）

(映画　かば　公式サイトより ＜https://kaba-cinema.com/＞)

会員消息

自身が教えている授業科目を履修している学生さんが、たとえば世界大会のスポーツ競技で活躍してくれることはとてもうれしいですが。ときに予定や期待していた結果が、残念ながらともなわなかった場合に、若い学生らの情熱や直向きさを応援するものの気持ちとして、とても悔しいけれども切り替えて、またさらなる目標を目指して闘志を燃やしてほしい‥とエールをおくりたいです。といいつつ、公欠扱いで不参加であった授業分について、教育者としては、しっかり当該学生らには課題レポートの提出をもとめるのでした。（谷本）

パソコンのスイッチをつけると、急にMicrosoftアカウントのパスワード提示が求められ、何度パスワードを入力してもはじかれてしまいました。パソコンに入ることができない！ いままで書いた論文などが消えたらどうしよう…。夜も寝られず…。業者さんに頼んで、なんとかデーターだけは助かりました。ふだんからデーターをUSBなどに保存しておかないとたいへんなことになると痛感しました。(山本剛)

久々にコラムとして博士課程の記録シリーズを書きました。執筆がのびのびとなって記憶が薄れていく中ですが、なんとか完結させたいと思っています。また、近況として、最近は教育方法学への関心が増し、本年度はカリキュラム学会や教育方法学会の大会へも参加してみました。普段参加する教育史学会などでは出会わない他大学の若手と交流することができ、異文化交流のような感じもあって、大変刺激的でした。コロナ禍で中断した学会の交流機能が復活しつつあるなかで、改めて研究を進めていこうと感じる今日このごろです。（猪股）

今年の関西教育学会は11月15日に近畿大学で開催なのですが、その準備などを結構楽しんでやっていたのですが、スケジュールを入れすぎて疲れてしまったのか、10月に、顔の右半分の筋肉が動きにくくなる「顔面神経麻痺」を経験しました。ご飯を食べにくくなったり、缶ビールを飲むときにビールが口からこぼれてしまって、「何かおかしいな」と思ったのが始まりでした。あとで調べたら、片目をつぶることや口笛を吹くこともできなくなっていました。

この症状は複数の原因がありますが、多いのは、耳の奥でヘルペスが活発化して顔の神経を圧迫して起きるケースだそうです。私の場合も、そのパターンのようでした。幸い、早めに受診できたためか1ヶ月ほどで、ほぼ元通りになりました。この症状は、早めの受診が非常に有効だそうです。また一つ新しい経験ができ、そして回復もでき感謝しています。

（冨岡）

神辺先生を訪ねて

『ニューズレター』同人で、第1号から「逸話と世評で綴る女子教育史」や、第40号から「我流・文献紹介」などを寄稿されていました神辺靖光先生は、10月初め高齢者施設に入所されました。現在先生は、これまでの研究の総括として、『明治前期中学校形成史総括編』の出版を進めていらっしゃいます。その念校の打ち合わせで、10月下旬、出版社の編集ご担当者と一緒に、先生を訪ねてまいりました。

先生はお顔の色もよく、食事も三食きちんと召し上がっておられるとのことで、お元気そうでした。「施設は設備も食事もよく、清掃も行き届いていて申し分ないのだが、新たな問題が起こった。」とおっしゃいます。その訳は…。

施設は1階が70代、2階が80代、3階が90代の入所者の個室となっています。現在96歳の先生は施設内では最年長で、居室は3階。この施設では、フロアーごとにある食堂で、皆さん一緒に食事をするのですが、その座席を決めるのを、入所者の自治に任せられているのです。ところが「誰それさんの隣は絶対いや！」などという人が何人もいて、毎回食事の座席を決めるのが非常に大変なのだそうです。皆さんそれぞれ社会で活躍し、それなりの人生経験を積んでこられた方々ばかりなのに、「まるで駄々をこねる子どものようだ」と。最年長の先生ゆえに、もめごとの仲裁や相談にしばしばひっぱり出されるのだそうです。

先生はこの施設で、読書と執筆をして静かに過ごす日々を思い描いていらっしゃったのですが…。施設側は、おそらく入所者が孤立しないように、少しでも皆さんとのコミュニケーションの場になるようにと考えて、自治に任せていらっしゃるのでしょうが、思わぬ人間関係に煩わされて、神経が疲れるとのことでした。

人間は年をとると我儘になるのでしょうか。いずれ私自身も施設への入所を考えているので、他人事とは思えず、「はて、どうしたものだろう。」と、考えさせられました。　（長本）